

特別支援学級在籍児童に対する交流学級での支援

嶋崎 真一・司城紀代美

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第6号 別刷

2019年8月9日

特別支援学級在籍児童に対する交流学級での支援[†]

嶋崎 真一*・司城紀代美**

真岡市立真岡小学校*

宇都宮大学大学院教育学研究科**

本研究では、特別な支援を必要とする児童が交流学級において交流及び共同学習を進めるとき、周りの児童と良好な関係を築いたり、学習を進める上での困難を和らげられたりすることができるような支援の方法・在り方を探求していくことを目的とする。特別な支援を必要とする児童が、周りの児童と共に学び合うためには、交流学級のクラスメートとの良好な関係作りが必要である。それは特別支援学級・交流学級を中心とした教師の児童に接する姿勢が大きく寄与しているものと思われる。また、児童が学習活動を有効に展開できる状況作りが必要である。そのためには全体と個人個人の特性に応じた学習指導と教材研究が重要であると思われる。

キーワード：特別支援学級、交流及び共同学習、子ども同士の関係

1. 問題と目的

(1) 特別支援学級の現状から

小学校学習指導要領（平成29年3月告示）第1章総則第5の2イでは、「他の小学校や、幼稚園、認定こども園、保育所、中学校、高等学校、特別支援学校などとの間の連携や交流を図るとともに、障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習の機会を設け、共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育むようにすること。」と示されている。

障害のある子どもと障害のない子どもと一緒に参加する活動は、相互のふれ合いを通じてお互いに豊かな人間性を育み、共同学習における教科等のねらいの達成をより発展的なものへと導く側面があるものと考えられる。さらに交流及び共同学習は、障害のある子どもの自立と社会参加を促進するとともに、社会を構成する様々な人々と共に助け合い支え合って生きていくことを学ぶ基礎となり、ひいては共生社会の形成に役立つものだと考えられる。

筆者は特別支援学級を担任する中で、児童によっ

て交流学級で学習する教科は異なるが、概ね、どの児童も交流学級で実りの多い体験をすることができたと考えている。例えば、体育においては、一緒に大なわ跳びやドッジボールをすることにより、「自分も交流学級の子ともたちと共に活動できるんだ」という自信をもつことができた。運動会のダンスや集団種目では、やり遂げたという充実感を感じることもできた。音楽においては、一緒に楽器を扱ったり、歌を歌ったりする中で連帯感を味わうことができた。特別支援学級に在籍している児童にとっては、技能的にも精神的にも得るものが大変多かったと言える。交流学級で他の児童とふれ合い共に学ぶということは、特別支援学級に在籍している児童の将来のことを考えると、必要でありかつ重要なことである。児童が交流学級での学習に参加し、そこでの体験から多くのことを学ぶと同時に達成感から自己肯定感を高め、将来に向かう力となるものを得ることが望まれる。しかし、交流学級に在籍している児童とトラブルを起こしたり、参加できずに途中で帰ってきてしまったりなどの様々な困難も発生した。

そこで、特別な支援を必要とする児童が、交流学級で周りの児童と共に学び合い有意義な学校生活を送れるための支援の方法を探究したいと考えた。

(2) 研究の目的

本研究では、特別な支援を必要とする児童が交流学級において交流及び共同学習を進めるとき、周り

[†] Shin-ichi SHIMAZAKI*, Kiyomi SHIJO**:
Support in exchange classes for special
support class students

* Moka Elementary School

** Graduate School of Education, Utsunomiya
University

(連絡先: shijo@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

の児童と良好な関係を築いたり、学習を進める上での困難を和らげられたりすることができるような支援の方法・在り方を探求していくことを目的とする。

2. 方法

栃木県内の小学校の特別支援学級に在籍している児童A児が交流学級で学習を行う場で参与観察し、周りの児童との交流の様子や学習の取り組みの様子などを把握する。そこから、対象児童のつまづき、戸惑いなどを和らげられる方法を考察する。

3. 結果と考察

(1) 交流学級のクラスメートとの活動の様子

①交流学級のクラスメートからの声掛け（説明・アドバイス・指示など）

授業開始前、特別教室移動後に離席していたり、特別支援学級教室に教科書を取りに行こうとして走り出したりしていた時などに、クラスメートからの一言で行動を調整することができていた。また、学習内容が分からない時には教えてもらい正解にたどり着くことができた。

交流学級のクラスメートは、A児に当たり前のようにアドバイスをし、それをA児はしっかり聞いて実行していた。A児が学習するにあたり、交流学級のクラスメートからの声掛けは極めて有効であると言えた。

②交流学級のクラスメートの姿を参考にして

教師の発問に対してA児自身の答えをまとめることができているのだが、挙手をするという一歩が踏み出せないでいることがあった。そんな場合、クラスメートの発表がきっかけとなって挙手する姿が見られた。授業中、楽しい学習内容をやっている時に笑いが起きると一緒に笑ったり、実物を見せられた時にはクラスメートに続いて見に行ったりしていた。

A児は、どうしていいのか分からなくなっている場合には、クラスメートの行動を参考にしていた。その様子は、外国語活動の外国語を使ったゲームや体育の水泳における浮き方の学習の時に多く見られた。学習を進める上での困難を乗り越えるための手立てなのだと推測された。

A児が学習を進めるにあたり、交流学級のクラスメートの行動はA児に多大なる影響を与えていた。

③交流学級におけるグループ活動、係、当番、つながりなど

基本的にA児は、クラスメートとの活動が楽しいようである。給食当番や材料などの配布の仕事を進んで行っていた。クラスメートに親切をする姿も見られた。グループ活動については、学習内容によっては抵抗感をもっているように感じた。その際、教師が声を掛けたり励ましたりすることが活動を継続させることに有効であった。

ゲームなどをする時、クラスメートとのトラブルを避けるために、T2がルールを説明したり分からなくなっていることを教えたりするような支援をするとスムーズに活動することができていた。

総合的に考えて交流学級のグループ活動などの集団行動におけるクラスメートとのつながりはA児により影響を与えていた。交流学級ではA児に温かく接する雰囲気ができていて、A児は喜びながらグループ活動や係や当番などの仕事に取り組んでいた。そのようなクラスメートとの関係を維持するために教師の声掛けや活動時の支援が重要になってくると思われる。クラスの雰囲気とA児の様子から、交流学級における学びの環境作りの大切さを実感できた。

(2) 学習の様子

①教師からの声掛け（説明・アドバイス・指示など）

学習時における教師からA児への声掛けがあることで、様々な場面においてA児が行動しやすくなっていた。たとえば、文章を書く活動を始められなかったり止まったりしている時には、開始・再開することができた。その時には、A児の頭の中でできている答えを文章で表現するきっかけとなっていた。学習の方向性がずれていたりする時には、修正・訂正をすることができ、器具の使い方やゲームの仕方が分からなくなっている時には、それらを理解することができた。

それらの声掛けをする際に、活動において複数の作業がある場合、一つを説明してそれが終わってから次を説明するというようにするとA児は充実した活動をすることができるようであった。

教師による的確なタイミングでの状況に応じた質と量の声掛けが、A児が学習目標を達成することに有効であると考えられた。

②学習のポイントを示すこと

教科書に書かれている文を音読する時や目で追う

時にはペンや指でその箇所を指してあげると見失わずに学習を進めることができた。ペンや指を進める速さでA児が音読を調整することができた。

絵を描く時には、大きさの目安となったり書き始めの場所を表したりするポイントを示してあげるとよりスムーズに描くことができた。習字の場合には、筆に注意力を向けさせ、一画一画、一字一字、アドバイストともに書き始めの場所などを伝え、より丁寧に書けるようになった。

また、教師の話を書く時、視線を向ける場所を伝え、より長い時間、話を聞くことができた。

A児が学習においてつまずいた時などに、要となるポイントを示すことで充実した学習を進めることができた。

③視覚効果（TV画面の活用、実物など）

TV画面に、音楽とともに歌詞が流れれば英語の歌を歌うことができるし、ゲームを進行させる映像が流れればゲームに取り組むことができた。実物投影機で映し出された画像とともに教師の話を中心して聞くことができていた。図工の材料や写真や生き物などの実物もA児の関心を高めることに効果があった。

視覚的な教材は、学習課題や活動内容を理解し、意欲を高めることにおいて有効な手段であると考えられた。

④意欲の持続・向上

A児は、昆虫や植物の実物を目の前にする理科、作品を仕上げる図工や書写、プール内で体を動かす体育（水泳）、TV画面を見ながら歌を歌ったりゲームをしたりする外国語活動に特に意欲的だが、集中力が途切れることも多々あった。その場合、教師の声掛けやヒントが意欲を持続させるのに有効であった。

パンフレットをもらったり毛虫がいたりするなどで、思いがけないことが起こると意欲は向上するので、それを学習に結びつけられるとより効果的であると考えられる。

プールでの活動では、苦手なあおむけ浮きに何度も挑戦していた。社会の白地図学習では細かい所まで着色していた。これらの頑張りを賞賛し次時の活動につなげることが意欲につながると考えられる。

視覚効果のあるものや実物がなくても、楽しいことが想像できる内容だと話を聞くことができた。児童に対する話し方を工夫することが重要であるとい

える。

上記のように意欲の持続・向上には様々な方法があり、それらを発展させていくことが大切だと思われる。

⑤自己肯定感

外国語活動のゲームにおいて勝つ体験を積ませることが次時の学習への意欲付けになることが実感できた。書写においては一画一画丁寧に指導したところ上手に書くことができ満足した様子が見ええた。また一生懸命に取り組む学習活動中の行いに関しては、常に肯定的見解で捉えることを忘れてはならないと感じた。

アドバイスをする際に注意しなければならない点にも気付くことができた。きめ細かなアドバイスは有効ではあるが、やり過ぎると嫌がる素振りや拒否する姿が見られた。このことから年齢に応じた自尊心を考慮してアドバイスをしなければならないということが分かった。

このように成功体験を積むことや教師が児童の努力を認め心情に配慮した態度を取ることが児童の自己肯定感の高まりにつながり、学校生活全般において児童の行動をよりよい方向へと導く原動力になると思われた。

⑥学習内容の確認

既習内容である漢字や片仮名、たし算・ひき算や単位などにおいて間違いが見られたが、指摘されるとすぐに直すことができた。しかしその時は直しても後日同じ間違いをしてしまっていた。その都度繰り返しアドバイスしたところ、定着が感じられた。

文章の趣旨を間違えて捉えて問題に取り組んでいることなどもあり、ノートやつぶやきをさりげなく観察しながら学習の方向性と習熟度を確認し、その時の学習の理解へとつなげていくことが重要であると思われる。

⑦整理整頓・片付け

机上に物がたくさんあるとそちらに目が向いて注意力が散漫になったり、物を落としてその都度学習が円滑に進まなくなったりしていた。教科書や道具などを正しい場所に置いたり、その授業で使わない物を机の中にしまったりすることが支援になるといえる。

書写や図工の後の片付けは苦手意識をもっているが、教えてもらうことで自分で進めることができた。

授業に臨む前段階における学習に集中できる状況

の整備の大切さを実感した。

⑧個性

算数で計算を進める過程において独特の方法で解いていた。考え方の方向性は合っておりA児が試行錯誤の上で編み出した方法ではないかと推測された。

チョウの図から猫の顔を想像したり、校舎の北と南は雨の当たり方が違うことに気付いたり、さなぎの図を見て気持ちを考えたりと物事を多面的に捉えることができていた。

色を塗る活動では、豊かな色彩感覚で細かいところまで注意して塗ることができていた。

A児は、このように今後もどんどん伸ばしてしてもらいたいすばらしい長所をたくさんもっている。これらを認め、生かしていくことが必要であると思われる。

4. 総合考察

特別な支援を必要とする児童が、周りの児童と共に学び合い有意義な学校生活を送れるために何が必要かをまとめていきたい。

まず交流学級のクラスメートとの良好な関係についてである。A児は交流学級に行くことに喜びを感じていた。A児は受け身になるだけでなく交流学級に貢献することもできていた。それらの活動後の表情から喜びを見て取ることができた。このような良好な関係を成立させるために、特別支援学級・交流学級の両担任の教師は児童に寄り添った学級経営をしていた。常に温かな気持ちをもって児童に接し、児童の声に耳を傾け、状況に応じた的確な指導をしていた。そのため、他の児童もA児に対しても温かく接することができているのだと思われる。また、A児が周りの児童との良好な関係を維持するためには、交流学級のクラスメートとトラブルを起こしたり、グループ活動についていけなかったり、活動時にルールを理解していなかったりした場合などに、声掛けなどの支援をして周りの児童との相互理解を促す必要があった。

次に充実した学習についてである。A児は集中力を持続させるのが難しい状況にあるが、要所要所で教師からの声掛けが学習活動を継続させるのに有効であった。またその学習の目安となるポイントを示すだけでよりよい学習を展開することができた。特別支援学級・交流学級とも、TV画面に映し出さ

れる画像・映像や実物などの学習活動を有効に展開できる教材が十分に用意されていたために、A児は楽しみながら学習に取り組むことができていた。A児は、図工の材料をいろいろと考えて加工したり、漢字や計算のプリントに次から次へと取り組んだり、蝶や花を目を大きくして見ていたりしていた。学習活動を行う際、A児に自信をもたせることが、よりよい行動につながることも分かった。本時の授業での学習課題を達成させるために、前時までの学習と本時のそこの学習の理解度の確認も必要であった。机上の整理整頓など、学習に取り組ませる環境作りも集中力を持続させるのに大切な要因となっていた。そしてA児の個性を教師が理解し温かく接するという姿勢が重要であると思われる。A児はそれを披露する機会が何度かあったが、笑顔で堂々と表現していた。先生方が肯定的にA児に接していたからこそ、A児は豊かな感性を失うことなく学校生活を送ることができていると考えられる。

特別な支援を必要とする児童が、周りの児童と共に学び合うためには、交流学級のクラスメートとの良好な関係作りが必要である。それは特別支援学級・交流学級を中心とした教師の児童に接する温かな姿勢が大きく寄与しているものと思われる。また、児童が学習活動を有効に展開できる状況作りが必要である。それができるためには全体と個人個人の特性に応じた学習指導と教材研究が重要であると思われる。そして、このような環境で特別な支援を必要とする児童が有意義な学校生活を送るためには、教師からの声掛けなどの支援が必要になってくると考えられる。

なお、これらの指導・支援は通常の学級でも十分に適用できるものであると思われる。以上のことを念頭において児童の指導にあたることが重要であるといえる。

平成31年3月29日 受理

Support in exchange classes for special support class students

Shin-ichi SHIMAZAKI, Kiyomi SHIJO